

教員と学生の学びと成長を考える

—その組織的・個人的実践に向けて—

企画者・話題提供者・司会者：畑野快（大阪府立大学高等教育開発センター）

話題提供者：大山牧子（大阪大学全学教育推進機構）

話題提供者：舘野泰一（立教大学経営学部）

話題提供者：伏木田稚子（首都大学東京大学教育センター）

指定討論者：村上正行（京都外国語大学外国語学部）

企画趣旨

ティーチングからラーニングへと教授学習パラダイムが転換して以降、学生の学びと成長（溝上, 2012）に注目が集まっている。しかしながら、大学の授業で学び、成長しているのは学生だけではない。教員もまた、授業を通して学び、成長しているはずである。教員、学生両者の学びと成長を踏まえた上で、研究を進めることが大学教育の発展において欠かせないだろう。

本セッションでは、「学生の主体的な学修態度」、 「教員の省察」、 「リーダーシップ教育」、 「ゼミナールでの学び」を手がかりにし、教員、学生の学びと成長を踏まえた組織的・個人的実践の実現可能性を探ることを目的とする。

「学生の主体的な学修態度の形成と促進に関する実証的研究」

畑野 快

学生の「主体的な学び」は、昨今の教育政策において重要な言葉の1つであるが、「主体的」という言葉は、多様に解釈されうるため、その用い方には注意を要する。これまで報告者は、学生の主体的な学修態度を「学生が授業や授業外で出される課題に対して能動的に取り組む態度」と定義し、その測定尺度の開発、さらにはその形成と促進に関する実証的研究を進めてきた。本報告ではこれまで得られた知見を報告し、学生の主体的な学修態度を促すための方策について議論したい。

「持続可能な教授活動の改善を目指した大学教員の省察」

大山牧子

大学教員は、教育のための訓練を受けずに教壇に立ち、改善のために参照できる素材が少ない中で、自ら教授活動を改善しなければならない。持続的な改善を目指すためには、自らの知識や経験をふりかえり、そこから改善の手がかりを得る省察が重要となる。報告者は大学教員の教授活動の

省察を「授業の文脈に応じて学生の学習を踏まえた上で、自らの行為や経験について熟考し、次期授業デザインの改善案、ならびに内容を効果的に教えるための知識（PCK）を生成するプロセス」と定義する。本報告では、大学教員が持続的に教授活動を改善するための省察について、省察の観点と、可視化のための方策について議論したい。「リーダーシップ教育を実施する主体に求められるリーダーシップ」

舘野泰一

近年の大学教育では、PBL（Project-Based Learning）やサービス・ラーニング等の導入により、教職員同士や、学生スタッフが協同して授業を運営する機会が増えている。リーダーシップ教育においても、リーダーシップ教育を実施する主体のリーダーシップが授業の成否を握る鍵となる。本報告では、立教大学経営学部 BLP の事例をもとに、リーダーシップ教育のプログラムを開発・実施する運営チームのプロセスに焦点をあて、授業の改善を通じた教職員・学生・コミュニティの変化について議論したい。

「ゼミナールは、誰にとつての学びの場なのか—教員と学生が探究することの価値」

伏木田稚子

ゼミナールは、古くはラテン語の *seminarium* を語源とし、学問の「種（semen）」が萌芽する「場（arium）」という意味をもつ。研究を通じた教育という理念の下、19世紀初頭のドイツに誕生し、20世紀初頭に日本にもたらされた後、形式や方法は多様化しながらも、学生の主体的な探究を教員が学知から支えるという構造は、連綿と引き継がれてきた。本報告では、教員がゼミナールを実践する際に参照できる理論が少なく、社会や大学の現状に即した柔軟な対応が求められる等の課題に焦点を当てつつ、専門性と汎用性の調和がとれた学びの様相について、参加者と議論を深めたい。